楽園を夢見て

齊藤 飛鳥
川野隆司・絵

ぼくは、緑色の日射しに包まれていた。
むせかえるような、ぬれた葉のにおい。
どこからともなく聞こえてくる、さまざまなノイズ。
そして、どこか懐かしい歌声。
「ねえ、ヘレン。またあの夢を見たんだ」
ぼくは、神殿の部屋で目覚めるとすぐにヘレンに言った。
ヘレンは、フォゴドボズと呼ばれる、ぼくに仕えるシークウェンだ。シークウェンは男が多いが、ヘレンは珍しい女のシークウェンだ。
「今年に入って五回目だよ？　不思議だなあ」
シークウェンは、口のきけない者がなるならわしがある。だから、ぼくは正確にはヘレンに手話で話しかけていた。
ぼくの肩についていた虫を追い払ってくれていたヘレンの白い手が、なめらかに動き、言葉をつむぎだす。
『不思議なことね、ゴゴ。本当に不思議なこと』
それから、ヘレンがいつものようにぼくの朝食を出したので、夢の話はこれきりになった。ぼくのようなフォゴドボズたちは暇ではない。朝食を終えたら、すぐに修業だ。
フォゴドボズは、惑星にごくまれにしか存在しない、神聖な存在だ。ヘレンの話によれば、存在するだけで惑星の調和を保つ力があるらしい。だから、世界各国が競ってフォゴドボズのための神殿を建てて、優秀なシークウェンたちにフォゴドボズの世話をさせているそうだ。
特にシークウェンたちの中でも重要かつ名誉なことは、ぼくのようなフォゴドボズに仕えることらしい。ヘレンは、ぼくに仕えられることが決まったとき、うれしさと畏れ多